

## &lt;研究ノート&gt;

## スウェーデンにおける耕地制度と農業革命

佐藤 睦朗

## 目 次

1. はじめに
2. ホブクロフト説の概要
3. スウェーデン農業史の視点からのホブクロフト説の修正
4. 総括

## 1. はじめに

アメリカの社会学者：ホブクロフト（Rosemary L. Hopcroft）は、1999年に刊行された『ヨーロッパ史における地域、制度、および農業変化』のなかで、中世から近代にかけてのヨーロッパにおける農業改良の地域差について、新制度派経済学（新制度学派経済学）の視点から理論的な考察を行っている<sup>1</sup>。そこでは、取引費用（transaction cost）と制度（institution）に着目して、取引費用を低下させる制度が定着していた地域や国において、早期に農業改良がなされたという理論が提起されている<sup>2</sup>。ここでいう制度には、国家が制定した諸制度のほか、共同耕地制をはじめとする地域・村落レベルでの慣習も含まれる。ホブクロフトは、特に開放耕地制の形態に注目して、規則的な形状の開放耕地制が定着せず、共同体規制の弱かった国や地域において農業革命が早期に進行したとする仮説をたてたうえで、イギリス、オランダ、フランス、ドイツ、そしてスウェーデンの5カ国の史実をふまえて、仮説の検証を行っている<sup>3</sup>。

この村落形態の地域差に着目したホブクロフトの研究は、ヨーロッパの村落モデルを再考しようとする、近年のわが国での研究動向と共通する側面をもっており、ヨーロッパ農業史における比較考察の重要な視座を提示していると思われる<sup>4</sup>。また、イギリスやドイツなどとともに、スウェーデンも考察の対象としている点で、スウェーデン農業史の観点からも注目に値する研究である<sup>5</sup>。ただし、そのスウェーデン農業史に関する議論は、限られた文献に依拠したものであり、スウェーデン本国での研究動向を全般的に把握したうえでの考察とはなっていない。このため、理論と史実の整合性について、もう少し詳細な検討が必要であると思われる。

そこで本稿では、18～19世紀のスウェーデンにおける農業景観と農業革命の地域差を考察した前稿<sup>6</sup>の補論として、スウェーデン農業革命研究の観点からホブクロフトの理論を考察するこ

とで、その有効性と問題点を明らかにしたい。これにより、新制度派経済学の視点から提起された農業史の理論を、スウェーデン農業史研究において発展的に継承するための視座が提示されることになろう。

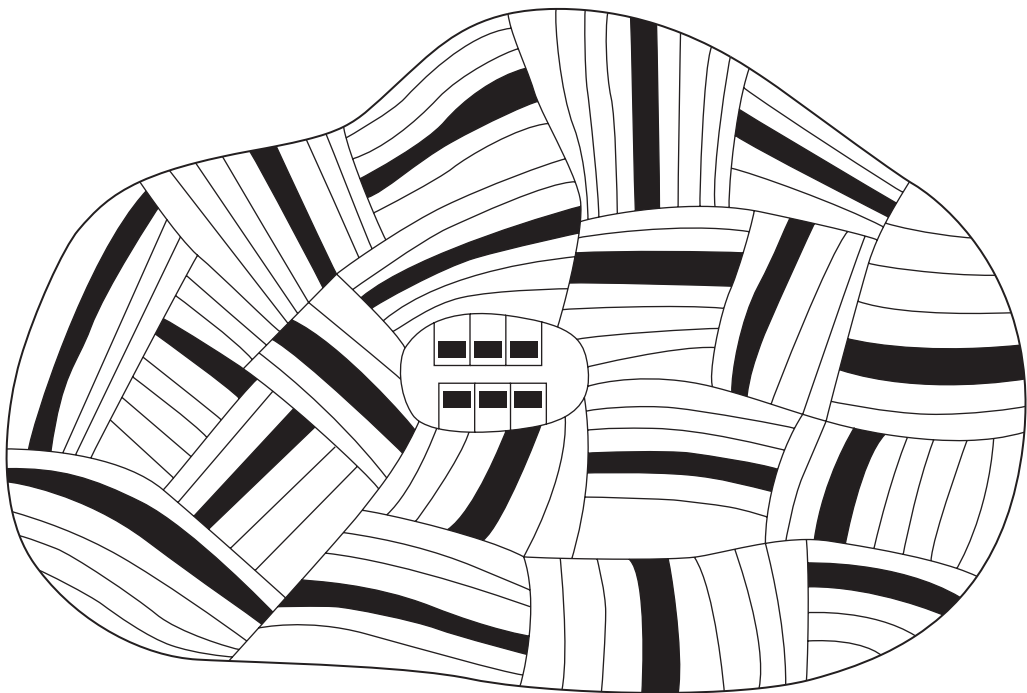
## 2. ホプクロフト説の概要

### (1) 理論的枠組み

上述のとおりホプクロフトは、ヨーロッパ史における農業改良の地域差について、「耕地制度」(field system)の違いに起因する耕地強制的強弱と関連付けて考察している。ここでいう耕地制度とは、地割ないしは混在耕地制の形態をさしており、これに基づいて「共同体的開放耕地制」(communal open field system)の地域と「共同性の弱い開放耕地制」(less-communal open filed system)の地域に大別している<sup>7</sup>。

前者の共同体的開放耕地制とは、規則的な形状の開放耕地制をさす(図1)。原典であるロバート・A・ドッジソン(Robert A. Dodgshon)の研究書では、「規則的な分割耕地」(regular sub-divided fields)と記載されているものである<sup>8</sup>。スウェーデンで該当するのは、東中部地方の太陽分割制(太陽制地割:solskifte)や南部スコーネ(Skåne)地方のボル分割制(ボル制地

図1 規則的な形状の開放耕地制(規則的な分割耕地)

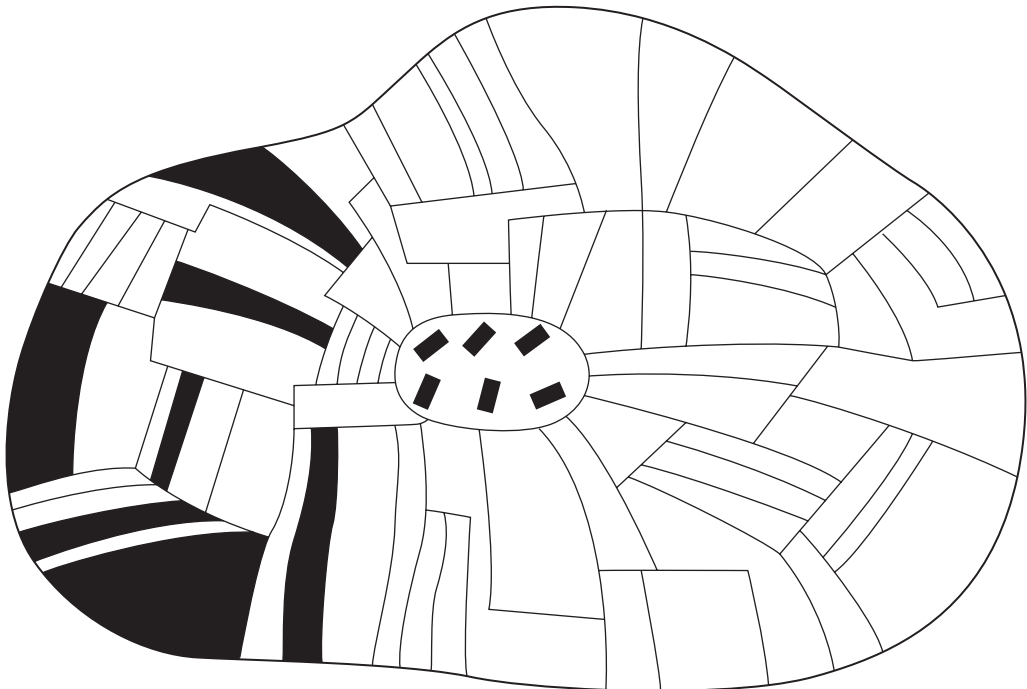


典拠：Robert A. Dodgshon, *The Origin of British Field Systems: An Interpretation*, London 1980, p. 47.

割：bolskifte)である<sup>9</sup>。このような共同体的開放耕地制では、耕地強制が強固であるため、農法や農作業のサイクルなどの変更を行うための取引費用が高くなり、結果的に農業革命の進行が遅れる傾向にある、というのがホブクロフトの仮説である。この共同体的開放耕地制の代表的な地域として、イギリスのミッドランド地方、フランス北東部、南西ドイツ、スウェーデン東部などの平野部が挙げられている<sup>10</sup>。

一方、共同性の弱い開放耕地制は、不規則な形状の地条からなる開放耕地制のことである(図2)。ドッジソンの研究書では、「不規則な分割耕地」(irregular sub-divided fields)と表記しているもので、一農家の地条が村落内で偏在し、共同体による耕地強制が弱い村落形態をさす<sup>11</sup>。小村・散居制地帯でみられた囲い込み耕地制(enclosed field system)も、この類型に含まれる。こうした不規則な地割耕地の村落では、個人経営の度合いが高いため、農業改良にも柔軟に対応しえたことから、共同体的開放耕地制に比べて農法の変更などに伴う取引費用が低く済み、農業革命が早期に進行する状況であった、とされている。このような共同性の弱い開放耕地制の主な地域には、イングランド東部と南西部、フランス南部や西部、ドイツ北西部と東部、スウェーデン西部・北部などが分類されている<sup>12</sup>。スウェーデン西部でみられた「自由な棒状地割」(fria stångskifte)とよばれる不規則な形状の開放耕地制は、この典型的な形態であるといえ

図2 不規則な形状の開放耕地制(不規則な分割耕地)



典拠：Robert A. Dodgshon, *The Origin of British Field Systems: An Interpretation*, London 1980, p. 48.

よう<sup>13</sup>。

ホブクロフトは、この二類型をイングランド、オランダ、フランス、ドイツ、およびスウェーデンの5カ国に適用して地域区分を行い、各国での農業改良の地域差について考察を行っている。ただし、単純に耕地制度のみによって農業改良の進展が規定されると主張しているわけではなく、領主制の強弱や公法のあり方、あるいは市場へのアクセス状況なども影響を与える要因として議論の中に組み込んでいる。耕地制度の二類型を含めて、ホブクロフトが各国の史実の検証を行う上で提起した仮説は、以下の6つである<sup>14</sup>。

- ① 共同体規制の弱い地域ないしは囲い込み地制地域において、共同体規制が強固な開放耕地制地域よりも早期に農業改良が進行する傾向にある。
- ② 農業改良・農業発展は、領主・地主層勢力が弱い地域で進行する傾向がある。
- ③ 農業発展は、環境（土壌や天候、地理的条件など）が農業に適した地域で起きる可能性が高い。
- ④ 農産物需要の高い市場へのアクセスが容易な国や地域において、農業発展が進む可能性が高い。
- ⑤ 国家制度や政策を通じて、生産や交換に関わる取引費用を低下させた国や地域において、農業発展が進展する傾向にある。
- ⑥ 国家の制度や政治によって、国税負担を抑制しえた国や地域において農業発展が起きた可能性が高い。またこの関連で、戦争が頻発した国や地域では、農業発展が起きにくい傾向がある。

このうち、仮説③～⑥については、伝統的な経済史で指摘されてきた内容で、取引費用の概念を用いて説明していること以外は、従来の通説と大きな違いはないといえよう。一方、仮説②については、地主大農場（gods）地帯において早期に農業改良が進展した事例もあることから、少なくともスウェーデン農業史では一概に正しいとは言えない。とはいえ、スウェーデンの自営農民層が積極的に農業改良に従事したことは、現在では通説となっていることから、仮説②も大きな問題はないと考えられる<sup>15</sup>。

以上の6つの仮説にもとに5カ国の農業史を検討した結果、ホブクロフトが導き出した結論は、共同性の弱い開放耕地制地域のうち、領主制が弱く、農産物市場へのアクセスが確保され、しかも国家が所有権の保護を支援していた国や地域において、農業改良が早期に進行した、というものであった。そして、これら4つの要因を相互に関連すると断ってはいるものの、結論の部分では、諸条件が同じ場合には、耕地制度が農業改良の地域差を規定すると述べている<sup>16</sup>。

## (2) ホブクロフト説のスウェーデン農業史への適用

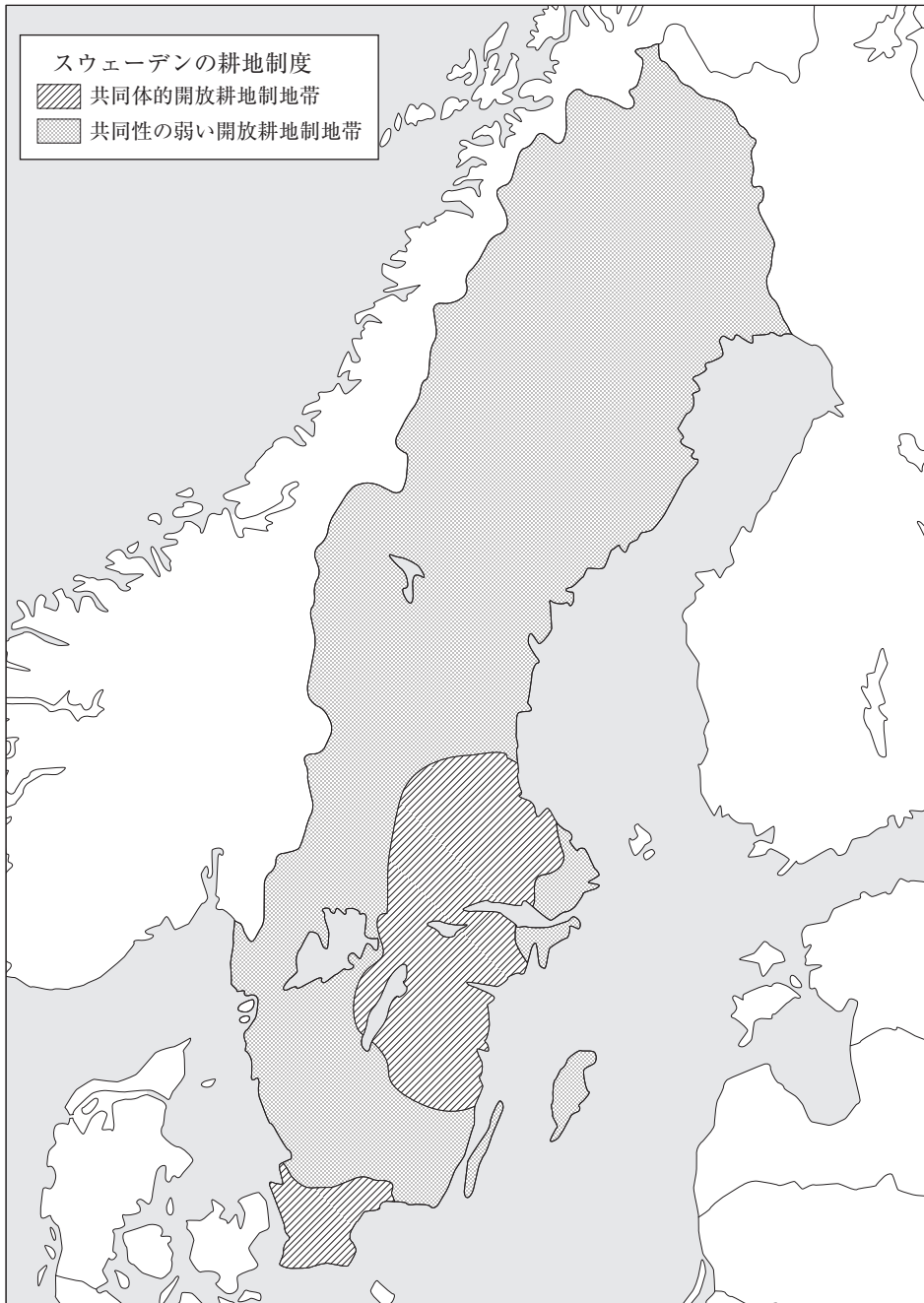
ホブクロフトは、比較考察のなかにスウェーデンを含めた理由として、農業改良の遅延が、領主制によるものではなく、共同体的開放耕地制の影響であることを示すのに適した国である点を挙げている<sup>17</sup>。つまり、領主制が他のヨーロッパ諸国に比べて弱く、「自営農民の国」であったスウェーデンの事例は、共同体的開放耕地制と農業改良との関係性をより明確に示しているとされている。

ホブクロフトは、図3に示されているように、スウェーデン東部と南部を「共同体的開放耕地制」の地帯、またそれ以外の地域を「共同性の弱い耕地制度」の地帯と定義したうえで、14世紀ころから19世紀半ばにかけてのスウェーデン農業史を概観している<sup>18</sup>。ここで、その概略を簡単にまとめてみよう。

14世紀のいわゆる「中世後期の危機」のなかで人口減少と経済的な衰退を経験したスウェーデンは、16世紀にはいると人口増加と好景気の時代を迎えた。この16世紀において、共同体的開放耕地制のスウェーデン東部では耕種農業が発達する一方で、スウェーデン西部では牧畜が発達し、スウェーデン東部と西部の間での分業構造が形成された。この段階で農業生産性が高かったのはスウェーデン東部であったが、その後の農業発展は主牧農業地帯の西部において進展する傾向がみられた。ただし、農業発展の重要な誘因の一つである人口圧力が弱く、かつ重税や土地所有権に関する法的規定の曖昧さ、あるいは経済政策の失敗などがあったため、領主制が弱かったにもかかわらず、スウェーデンでの本格的な農業革命の開始は、18世紀まで遅れることになった。この18世紀以降に、共同性の弱い開放耕地制地帯であるスウェーデン西部において、新しい農具・農法の導入や開墾の進行などの農業革命が比較的早期に進行した。一方、スウェーデン東部での農業革命の進行は、土地整理(jordskifte:エンクロージャー)によって共同体的開放耕地制が解体する19世紀半ばまで待たなくてはならなかった。

こうしたスウェーデン農業史の考察から、ホブクロフトは、共同体的開放耕地制と領主制は相互に関係が深いものの、農業発展を阻害する主たる要因は領主制ではなく、共同体的開放耕地制である、と結論付けている。

図 3 ホブクロフトによるスウェーデン農村の地域区分



典拠：Rosemary L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change in European History*, Ann Arbor 1999, p. 201.

### 3. スウェーデン農業史の視点からのホプクロフト説の修正

ホプクロフトによるスウェーデンの東部と西部の比較考察は、おおむねスウェーデン農業史の通説と一致しているといえる。近年のスウェーデン農業史における東西比較論を整理すると、以下のとおりである。16世紀に主牧地帯に移行したスウェーデン西部において、18世紀から19世紀にかけての土地整理による開放耕地制の解消や近代的輪作農法（våxelbruk：穀草式農法や輪栽式農法をさす）への移行、あるいは鉄製犁の導入などといった農業革命の進展が、スウェーデン東部によりも早く進行し、19世紀半ばまでには一連の農業改良はほぼ完了していた。一方、16世紀にはいるまでは「先進的な耕種農業地帯」であったスウェーデン東部では、19世紀半ばの段階でもオーデル（årder）とよばれる無へラ犁が広く使用され、かつ二圃制が維持されており、農業革命の進行が遅れる傾向がみられた<sup>19</sup>。

このようにホプクロフトは、自身の理論とスウェーデン農業史における地域区分論との整合性を示すことにある程度成功しているといえよう。限られた文献に依拠した考察ではあるが、スウェーデンにおける農業革命の地域差を理論的に説明した点で、ホプクロフトの研究は高く評価されよう。

ただし、この理論的な枠組みでは説明しきれない史実について、考察が必ずしも十分にはなされていないように思われる。以下、その問題点を検討することを通じて、ホプクロフトの理論的枠組みがスウェーデン農業史研究に適合的となるよう、一部修正を試みることにしたい。

#### (1) ホプクロフトによる地域区分の問題

ホプクロフトによるスウェーデンでの耕地制度の地域区分（上述の図3）には、本国の通説をふまえると、不正確な部分がある。スウェーデン東部と南部を共同体的開放耕地制と定義することは必ずしも誤りではないが、図4に示されるように、ウステルユートランド（Östergötland）地方南部からスモーランド（Småland）地方西北部にかけては、太陽分割制（太陽制地割）が定着しなかった地域であることから、共同性の弱い開放耕地制地帯に含めるべきであろう。同様の理由から、ヴェステルユートランド（Västergötland）地方のヴェッテン（Vättern）湖周辺やナルケ（Närke）地方の西部も、共同体的開放耕地制からは必ず必要がある。さらに、スコーネ地方北部の森林地帯（skogsbygd）も、規則的な形状のボル分割制（ボル制地割）が定着しなかった地域であることから、共同体的開放耕地制ではなく、共同性の弱い開講耕地制地帯に含めるべきであると考えられる。

このように、全体的にはホプクロフトが想定したよりも、共同体的開放耕地制はスウェーデン東中部および南部の限定された地域に縮小されるとみて大過はないであろう<sup>20</sup>。ここから、ホプクロフトが誤って共同体的開放耕地制とみなした地域について、理論的な整合性がとれているのか、という疑問が生じる。この点を、ウステルユートランド地方の事例から検討してみよう。

図4 土地整理（エンクロージャー）実施以前の耕地形態



典拠：U. Sporrang, "Odlingslandskapet före1750", i B M P. Larsson, M. Morell & J. Myrdal (red.), *Agrarhistoria*, Stockholm 1997, s. 37.



ウステルユートランド地方では、西部から中部に広がる平野部において広範に規則的な形状の開放耕地制が定着していたのに対して、同地方南部に広がる森林地帯では、孤立農圃や二軒の農家しか存在しない小村が多く、耕地強制も未成熟であった<sup>21</sup>。それでは、ウステルユートランド地方中部の平野部と同地方南部の森林地帯を比較した場合、後者の地域での農業改良の進行が早いかというと、必ずしもそうではない。18世紀半ばから開始された第一次土地整理である「大農地分合（大分割）」(storskifte)は、ウステルユートランド地方南部の森林地帯において、平野部よりも遅れて進行した<sup>22</sup>。また、19世紀前半以降の第三次の「法定農地分合（法分割）」(laga skifte)においても、平野部の方が森林地帯よりも早期に実施が進んでいる<sup>23</sup>。このため、ウステルユートランド地方に限定した場合、共同性の弱い開放耕地制地帯において、共同体的開放耕地制地帯よりも農業改良が早く進行したとは言えないのである。

この問題をどのように考えるべきであろうか。ホブクロフトは、耕地部分の地条形態に着目して取引費用を想定したことは、既に述べたとおりである。この視点は、村落内での共同耕地部分が占める割合が高い平野部の村落について考察する場合には、一定の有効性があると思われる。だが、採草地や放牧地、森林などの占める割合が共同耕地よりも高い森林地帯の場合は、共同耕地部分の地条形態のみで取引費用を考察することは適切ではないであろう。この森林地帯の村落については、ホブクロフトの理論では考察の対象外となっている、放牧地や森林などの共有地における取引費用も考慮に入れる必要があると考えられる<sup>24</sup>。このため、スウェーデン農業史研究の視点からは、平野部の村落についてはホブクロフトの理論を適用しうが、森林地帯の村落については別途考察する必要があるといえよう。

## (2) 市場動向と農業革命

ホブクロフトの研究では、上述の仮説④にあるように、「市場アクセス」も視野に入れて考察がなされている。しかしながら、スウェーデンに関する最終的な結論部分では、耕地制度の問題に重点がおかれ、市場動向との関係性については、ほとんど考察されていない。だが、18～19世紀のスウェーデンにおける農業革命の地域差を考えるうえで、市場の誘因との関係は切り離して考察することはできないと思われる。以下、ホブクロフトの議論では看過されがちである市場動向と農業革命との関連について、スウェーデン本国での研究成果をふまえて検討してみよう。

18世紀以降のスウェーデンにおける農業改良は、牧畜・畜産部門での需要の拡大、とりわけ飼料需要の拡大との関連で進行した事例が多い。例えば、18世紀半ばにスウェーデン中部のダーラナ(Dalarna)地方において、近代的輪作農法の1つである「コッペル農法」(Koppelbruk)が導入されたのは、輸送用の家畜の需要が拡大するなかで、飼料作物の増産に迫られたことによるものであった<sup>25</sup>。また、19世紀前半にスウェーデン西部や南部で近代的輪作農法が導入されたのも、1820年代以降のイギリスへのオート麦輸出の拡大を受けて、飼料用作物であるオート麦が増産されたことが一因であった<sup>26</sup>。つまり、国内外での飼料用穀物市場の拡大が、ス

ウエーデン西部や南部における農業革命の大きな誘因となったのである。

これに対して、16世紀以来、ライ麦を中心とした二圃制（ウステルユートランド地方西部では大麦を中心とした二圃制）が定着していた東中部スウェーデンの平野部では、穀物余剰地帯ということもあって、19世紀半ばまで牧畜はそれほど発展しておらず、かつ飼料用のオート麦栽培もそれほど拡大していなかった。このような西部や南部でみられた市場の誘因の欠如が、スウェーデン東部において農業革命の進展が遅れた一因であると考えられる。この点は、スウェーデン東部において、1870年代にはいると、ライ麦価格が下落するなかで、相対的に価格が上昇したオート麦栽培が拡大し、それが二圃制から輪栽式農法への移行した一因になったことから窺えよう<sup>27</sup>。

このように、スウェーデン農業史では、牧畜・畜産部門での需要拡大に伴い市場の変化が農業革命に大きな影響を与えたという視点で論じられる傾向にある<sup>28</sup>。こうした市場動向を視野に入れた場合、共同体的開放耕地制であったスコーネ地方南部において、共同性の弱い開講耕地地帯の西部と並んで、比較的早期に農業革命が進行した要因の説明が可能となると思われる。また、スウェーデン東部の森林地帯において、共同体的開放耕地地帯である平野部と同様に19世紀半ばまで農業革命の進行が遅れた要因についても、市場の問題を抜きにしては議論できないであろう。このため、耕地制度の相違による取引費用のみで農業革命の進行の差異を説明することには限界があり、市場の誘因も視野に入れたうえで考察を行う必要であると考えられる。

#### 4. 総括

ホブクロフトによって提示された、規則的な形状の開放耕地制の「共同体的開放耕地制」地帯と、不規則な形状の開放耕地制に特徴付けられる「共同性の弱い開放耕地制」地帯という区分は、スウェーデン農業史研究においても一定の有効性を有すると考えられる。特に、スウェーデン東部と西部を大まかな比較する際には有効であるといえよう。

ただし、ホブクロフトのように農業改良の地域差を、耕地制度の形状の相違点のみで議論に収斂させることには限界があると思われる。スウェーデン農業史研究では、平野部と森林地帯を区別して考察することが不可欠であり、後者の村落の場合は、共同耕地部分以外の共有地での取引費用も考慮に入れる必要がある。また、牧畜・畜産関連の需要を中心とした市場動向との関係性も視野に入れることも重要であろう。

18～19世紀のスウェーデンにおける農業革命の地域差には、多くの要因が複雑に関連しあっている。そのなかの1つとして、ホブクロフトが指摘した耕地制度の相違点による地域二類型を視野に入れて考察することは、スウェーデン農業史研究にとっても十分に意義があると思われる。その際、他の諸要因を含めた複眼的な視点で考察することで、この新制度派経済学から提起された理論を活かすことができると考えられる。

## 注

- 1 Rosemary L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change in European History*, Ann Arbor 1999.
- 2 経済史研究における取引費用と制度については, Douglass C. North & Robert Paul Thomas, *The Rise of the Western World. A New Economic History*, Cambridge 1973, pp. 93-94. (速水融・穂本洋哉訳『西欧世界の勃興—新しい経済史の試み— (増補版)』ミネルヴァ書房, 1994年, 130-132頁); Douglass C. North, *Institutions, Institutional Change and Economic Performance*, Cambridge 1990, pp. 61-69. (竹下公視訳『制度・制度変化・経済成果』晃洋書房, 1994年, 83-94頁).
- 3 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, pp. 58-229. 同書の要約版である英語論文として, Rosemary L. Hopcroft, "Local Institutions and Rural Development in European History", *Social Science History* 27 (2003), pp. 25-74. ただし, この論文では4カ国比較となっており, スウェーデンは考察対象から除外されている。
- 4 代表的な研究として, 藤田幸一郎「ヨーロッパ農村共同体論における『内畑・外畑制』の意義」『一橋経済学』第2巻第2号(2008年), 105-128頁; 平井進「ヨーロッパ農村社会史研究と共同体再考—北西ドイツ農村史の視点から—」(日本村落研究会編『年報村落社会研究第44集: 近世村落社会の共同性を再考する—日本・西欧・アジアにおける村落社会の源を求めて—』農山漁村文化協会, 2009年, 所収)。なお, イギリス農業史研究における共同耕地制論については, 伊藤栄晃「近代イングランドにおける共同耕地制論の変容」『関東学園大学経済学紀要』第37集(2012年), 1-105頁。
- 5 管見の限りでは, スウェーデンでは, ホップクロフトの研究についてふれている文献はない。ただし, 取引費用や制度の概念を用いた手法の研究は, 一定の影響力を有している。その代表的な文献として, Ronny Pettersson, *Ett reformverk under omprövning. Skifteslagstiftningens förändringar under första hälften av 1800-talet*, Stockholm 2003.
- 6 拙稿「18世紀前半の東中部スウェーデンにおける農業景観」『(神奈川大学) 商経論叢』第45巻4号(2010年), 279-320頁; 同「18-19世紀のスウェーデンにおける農業革命」『経済貿易研究』第37号(2011年), 77-110頁。なお, 拙稿を公表した後に, 以下の英文によるスウェーデン農業史の研究書が刊行された。Janken Myrdal & Mats Morell (eds.), *The Agrarian History of Sweden from 4000 bc to ad 2000*, Lund 2011. 同書は, 全5巻で刊行されたスウェーデン語版の「スウェーデン農業史」シリーズの英語要約版であるが, 最終章にあたる第7章「スウェーデン農業史—より広い視点—」は新たに書き加えられた部分である。
- 7 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, pp. 15-24.
- 8 Robert A. Dodgshon, *The Origin of British Field Systems: An Interpretation*, London 1980, p. 47.
- 9 太陽分割制(太陽制地割)とボル分割制(ボル制地割)については, 前掲拙稿「18世紀前半の東中部スウェーデンにおける農業景観」299-308頁。
- 10 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, p. 20.
- 11 R.A. Dodgshon, *The Origin of British Field Systems...*, pp. 47-48.
- 12 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, pp. 20-24.
- 13 「自由な棒状地割」については, 前掲拙稿「18世紀前半の東中部スウェーデンにおける農業景観」308-310頁。
- 14 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, pp. 48-57.
- 15 近年のスウェーデン農業史研究では, 自営農民地帯において早期に農業改良が進展したとみる見解が有力となっている。ただし, 新しい農具や農業機械の導入, あるいは第一次・第二次土地整理の初期段階については, 地主大農場において早期に着手された事例もみられる。これらの点については, 拙稿「18-19世紀のスウェーデンにおける農業革命」86-108頁。なお, 農業革命における自営農民層の主体性を強調した, 比較的新しい研究として, Pablo Wiking-Faria, *Freden, friköpen och järnplogarna. Drivkrafter och förändringsprocesser under den agrara revolutionen i Halland 1700-1900*, Göteborg 2009.
- 16 R. L. Hopcroft, *Regions, Institutions, and Agrarian Change...*, pp. 237-238.

- 17 *Ibid.*, p. 198.
- 18 *Ibid.*, pp. 196-229.
- 19 前掲拙稿「18-19世紀のスウェーデンにおける農業革命」108-110頁。
- 20 ただし、ストックホルム周辺をはじめとするウップランド (Uppland) 地方およびスーデルマンランド (Södermanland) 地方の東部で共同性の弱い開放耕地制地帯とされている部分については、共同体的開放耕地制に分類すべきであろう。
- 21 Karl-Henrik Pettersson, *Groveda. Om en bondgårds ekonomiska historia 1786-1950*, Stockholm 2002, s. 59-63. ウステルユートランド地方の農業景観区分については, Kalle Bäck, *Sverigebildens: en historia om rödfärg, tegel, trädgårdar och byggnader eller Hem och hus: bebyggelseförändringar på landsbygden 1840-80*, Klockrike 2008, s. 15.
- 22 Kalle Bäck, *Bondeopposition och bondeinflytande under frihetstiden. Centralmakten och östergötaländernas reaktioner i näringspolitiska frågor*, Stockholm 1984, s. 203-204.
- 23 Kalle Bäck, *Början till slutet. Laga skiftet och torpbebyggelsen i Östergötland*, Klockrike 1992, s. 38.
- 24 スウェーデンにおける共有地に関する英語文献として, Kerstin Sundberg, "Nordic common lands and common rights. Some interpretations of Swedish cases and debates", in Martina De Moor, Leigh Shaw-Taylor and Paul Warde (eds.), *The management of common land in north west Europe, c. 1500-1850*, Tournhout 2002, pp. 173-193.
- 25 Carl-Johan Gadd, "Jordbruksteknisk förändring i Sverige under 1700- och 1800-talen - regionala aspekter", i Lennart Andersson Palm, Carl-Johan Gadd & Lars Nyström, *Ett föränderligt agrarsamhälle. Västsverige i jämförande belysning*, Göteborg 1998, s. 181-183; Carl-Johan Gadd, *Den agrara revolutionen 1700-1870*, Stockholm 2000, s. 305-306.
- 26 Carl-Johan Gadd, "Odlingssystemens förändring under 1700- och 1800-talen", i Ulf Jansson & Erland Mårald (red.), *Bruk, odla, hävda. Odlingssystem och uthålligt jordbruk under 400 år*, Stockholm 2005, s. 82-83. スウェーデン西部でのオート麦栽培の拡大, およびオート麦輸出の拡大については, 前掲拙稿「18-19世紀のスウェーデンにおける農業革命」88-90頁。
- 27 C-J. Gadd, "Odlingssystemens förändring under 1700- och 1800-talen...", s. 83.
- 28 スウェーデンにおける牧畜・畜産部門の需要拡大と農業革命の進行との関係性については, 前掲拙稿「18-19世紀のスウェーデンにおける農業革命」108-109頁。